

令和8年度 学校経営計画に対する自己評価計画書

石川県立門前高等学校

重点目標 1 全教育活動を通して生徒一人ひとりの自己肯定感を高めるため、授業改善等により教員の生徒指導力・教科指導力・災害後の心のケアを含めた生徒理解力の向上を図る。

個別目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考	
<ul style="list-style-type: none"> 授業改善を通して教員の生徒指導力、教科指導力、生徒理解力を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> 年に2回互見授業期間を設定し、授業改善を通じた指導力・理解力の向上 I C T機器を活用した授業の研修を行い、個別最適な学びに対応した授業力の向上 	教務課	<ul style="list-style-type: none"> 各学年、クラスともに多様な生徒を抱え、個別最適な学びを進めることが重要となっている。 	【成果指標】（教員） 教員一人一人が授業改善をした結果、生徒指導力、教科指導力、生徒理解力の高まりを感じている。	「生徒の達成感や自己肯定感が高まるよう、I C Tを活用するなどの授業改善を行った結果、生徒指導力、教科指導力、生徒理解力が高まった」と評価した教員の割合（①+②）が A 80%以上 B 75%以上 C 70%以上 D 70%未満	① 高まった ② 概ね高まった ③ 余り高まっていない ④ 全く高まっていない	教員対象調査 (7、12月)
				【成果指標】（生徒） 生徒一人一人が、授業のなかで自己有用感、自己肯定感を感じている。	「授業を通じて、他者の良いところや自分の良いところを見つけることができ、自分に自信が持てるようになった。」と評価した生徒の割合が（①+②）が A 75%以上 B 65%以上 C 50%以上 D 50%未満	① 自信が持てるようになった ② 概ね自信が持てるようになった ③ 余り自信が持てなかった ④ 全く自信が持てなかった	
<ul style="list-style-type: none"> いじめを早期発見・早期対応する。 	<ul style="list-style-type: none"> 全職員が、「いじめを見逃さない」という意識を常に持ち、生徒の言動へのより深い注意力の醸成（気になる言動に対し、必ず声を掛け、職員間で共有する） いじめ調査の実施 いじめに関する校内研修 	生徒相談課	<ul style="list-style-type: none"> 思慮深さに欠けるかわり方をしてしまう生徒に対し、相手目線に立った思いやりのある言動が取れるよう、継続的に指導していく必要がある。 	【成果指標】（教員） 日々の生徒観察を注意深く行い、気になる言動が見られた場合は必ず声を掛け、職員間で共有している。	「日々の生徒観察を注意深く行い、気になる言動が見られた場合は必ず声を掛け、職員間で共有できている。」と評価した教員の割合（①+②）が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	① できている ② 概ねできている ③ 余りできていない ④ 全くできていない	教員対象調査 (7、12月)
<ul style="list-style-type: none"> 生徒の自己肯定感を高め、主体的に社会性を育むことのできる生徒指導を組織的に実践する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学年会の充実 <ol style="list-style-type: none"> 「付けたい力」を明確にし、特別活動（学校行事・学級活動・生徒会活動）、総合的な探究の時間の充実を図る。 学習の軌跡を残すことで自他の変容に気づき、生徒(たち)が自分(たち)で自分(たち)の取組を価値づけることができるよう、ふりかえりの充実を図る。 教師からも賞賛・労いの声かけを行い、成功体験はもちろん、その過程にも価値を見いだせるようにする。 構成的グループエンカウンターの年間を通じた実践 規範意識の醸成を目指した継続的な指導 教員の生徒理解力の向上 	生徒相談課	<ul style="list-style-type: none"> 個・集団の良さを引き出す、生み出す視点を常に持ち、学校教育活動の実践に取り組み、生徒自らが自分や相手の良さに気づき、互いを尊重し伸ばしあおうとする態度を育てていく必要がある。 	【成果指標】（教員） 個・集団双方に目を向け、「付けたい力」を明確にして学校教育活動の実践に取り組み、生徒自らが自己肯定感を感じられるような声かけ、ふりかえりや評価を行っている。	「個・集団双方に目を向け、『付けたい力』を明確にして学校教育活動の実践に取り組み、生徒自らが自己肯定感を感じられるような声かけ、ふりかえりや評価を行っている。」と評価した教員の割合が（①+②）が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	① 行っている ② 概ね行っている ③ 余り行っていない ④ 全く行っていない	教員対象調査 (7、12月)
				【成果指標】（生徒） 部活動、学校行事、学年・学級活動等を通し、「頑張った」「分かった」「できた」「誰かの(みんなの・地域の)役に立てた」と感じることがある。	「部活動、学校行事、学年・学級活動、探究活動、ボランティア活動等を通し、『頑張った』『分かった』『できた』『誰かの(みんなの・地域の)役に立てた』と感じたことがある。」と評価した生徒の割合が（①+②）が A 100% B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	① とても感じた ② 少し感じた ③ 余り感じなかった ④ 全く感じなかった	
<ul style="list-style-type: none"> 教育相談的視点からの生徒理解力を高め、生徒のSOSに気づき、適切に対応できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 「気づき票」を活用した生徒理解の場の設定 ⇒学年会で気になる生徒について話し合う機会を必ず設け、毎月の職員会議で共有 個人面談の実施（担任・学年・相談担当・SC等） 生徒の困りに対し、必要に応じて外部機関からの助言等も活用して支援や合理的配慮の計画を立て、全教職員で共通実践 校内若手研修等で、ケーススタディを行い、生徒の困りへの共感力・対応力の向上力の醸成 	生徒相談課	<ul style="list-style-type: none"> 被災した生徒の心理的ケアを含め、カウンセリングマインド（受容・傾聴・共感）のもと、生徒の気持ちに寄り添った組織的かつ継続的な指導・支援を行う必要がある。 	【成果指標】（教員） 学年団での生徒理解を軸とし、カウンセリングマインド（受容・傾聴・共感）を持った組織的・継続的な生徒対応の実践を心掛けている。	「学年団での生徒理解を軸とし、カウンセリングマインド（受容・傾聴・共感）を持った組織的・継続的な生徒対応の実践を心掛けている。」と評価した教員の割合（①+②）が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	① 心掛けている ② 概ね心掛けている ③ 余り心掛けていない ④ 全く心掛けていない	教員対象調査 (7、12月)
				【満足度指標】（生徒） 先生たちは、自分が悩んだり困ったりした時に、親身になって話を聞いてくれる。	「先生たちは、自分が悩んだり困ったりした時に、親身になって話を聞いてくれる。」と評価した生徒の割合が（①+②）が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	① 聴いてくれる ② 概ね聴いてくれる ③ 余り聴いてくれない ④ 全く聴いてくれない	

<ul style="list-style-type: none"> スマートフォン等を安全かつ便利に使用する力を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒アンケートに基づく研修を通じた共通理解と指導（アンケート（7月実施））（研修（8月職員会議で実施）） 全教員による校内ルール徹底の指導 	生徒相談課	<ul style="list-style-type: none"> 「自分にとって危険である」「自分にとって妨げになる」といった意識を持ち、自制する力を身に付ける必要がある。 	【成果指標】（教員） 生徒がスマートフォン等を自分で正しく使う力が身に付けられるよう指導した。	「危険が無い、トラブルが起こらないか、自分の本来行うべきことの妨げになっていないかを生徒自身が考えて、スマートフォンやクロムブックを使用できるように指導している。」と評価した教員の割合（①+②）が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	① している ② 概ねしている ③ 余りしていない ④ 全くしていない	教員対象調査 (7、12月)
				【成果指標】（生徒） スマートフォン等を自分で正しく使う力が身に付いた。	「危険が無い、トラブルが起こらないか、自分の本来行うべきことの妨げになっていないかを考えて、スマートフォンやクロムブックを使用している」と評価した生徒の割合（①+②）が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	① している ② 概ねしている ③ 余りしていない ④ 全くしていない	生徒対象調査 (7、12月)
<ul style="list-style-type: none"> 日常的なあいさつを習慣化する。 	<ul style="list-style-type: none"> 登下校時の指導において、あいさつの励行 教員によるあいさつの率先垂範 生徒自身があいさつの意義を実感できるような取組を考え実践 	生徒相談課	<ul style="list-style-type: none"> 生徒間のあいさつ、様々な場面でのあいさつ（感謝や謝意を伝えるなど）について、当たり前前にできるよう指導していく必要がある。 	【成果指標】（教員） 生徒があいさつの意義を感じ、場面に応じた自発的なあいさつを習慣化できるよう、自らが率先励行し指導した。	「生徒があいさつの意義を感じ、場面に応じた自発的なあいさつを習慣化できるよう、自らが率先励行し指導した。」と評価した教員の割合（①+②）が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	① している ② 概ねしている ③ 余りしていない ④ 全くしていない	教員対象調査 (7、12月)
				【成果指標】（生徒） 場面に応じた挨拶を自発的にできる。	「場面に応じたあいさつ（出会ったとき・何かしてもらったとき・迷惑をかけたときなど）を自分からできた」と評価した生徒の割合（①+②）が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	① できた ② 概ねできた ③ 余りできなかった ④ 全くできなかった	生徒対象調査 (7、12月)
<ul style="list-style-type: none"> ボランティア活動による地域・他者貢献意識の高揚を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 総持寺参道清掃 地域ボランティアへの参加 年賀状作成 各種地域行事への参加 	総務課 生徒会 各学年	<ul style="list-style-type: none"> 震災後は支援を頂く機会が多く、自分たちが主体的に復興に貢献する意識がまだ低い。 	【満足度指標】（生徒） 参道清掃や被災地域でのボランティア活動への参加等を通して、「地域貢献の心」「被災者への思いやりの心」「協働する心」が育った。	「参道清掃や被災地域でのボランティア活動への参加等を通して、「地域貢献の心」「被災者への思いやりの心」「協働する心」が育った」と答えた生徒の割合（①+②）が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	① できた ② だいたいできた ③ 余りできていない ④ 全くできていない	生徒対象調査 (7、12月)

重点目標2 「門前町・総持寺通り商店街の創造的復興」を探究活動のテーマとし、地元のみならず他地域、他校との交流によって「問い」を深化させ、学びを社会につなぐことで探究活動を質的に高める。

個別目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考	
<ul style="list-style-type: none"> 地域の創造的復興に貢献する資質・態度を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 創造的復興をテーマとした「総合的な探究の時間」の充実 創造的復興に向けた地域との連携 	教務課 各学年	<ul style="list-style-type: none"> 門前町以外から入学する生徒も増え、それに伴い地域の復興に携わってこなかった生徒も増えた。生活の拠点となる町のことをよく学び、地域の創造的復興に取り組む姿勢や素質を醸成する必要がある。 フィールドワークを通して、現状やニーズを知り、門高生だからできるハード・ソフト両面からの復興支援を提案し、実践する力を身に付ける必要がある。 	【成果指標】（教員） 地元のみならず他地域、他校との交流によって「問い」を深化させ、学びを社会につなぐことで探究活動を質的に高めることができた。	「地元のみならず他地域、他校との交流によって「問い」を深化させ、学びを社会につなぐことで探究活動を質的に高めることができた」と評価した教員の割合（①+②）が A 70%以上 B 60%以上 C 60%未満	① できた ② 概ねできた ③ 余りできなかった ④ 全くできなかった	教員対象調査 (7、12月)

重点目標3 「GIGAスクール構想」を通して低学年次より個別最適な学びに取り組ませることで両コースの特性を高め、卒業後の生徒の多様な進路実現につなげる。

個別目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考									
<ul style="list-style-type: none"> 低学年次から、一人1台端末やタブレット等の教育ICT環境を活用した学習に取り組み、「個別最適な学び」の充実による学力の向上を目指す。 	<p>【両コース共通】</p> <ul style="list-style-type: none"> 家庭学習を前提とした授業 習熟度別授業 朝学習 放課後補習 個別指導 <p>【普通コース】</p> <ul style="list-style-type: none"> 模試の振り返り <p>【キャリアコース】</p> <ul style="list-style-type: none"> 各種資格取得 	進路指導課 教務課 GIGA校内推進リーダー 各学年 各教科	<ul style="list-style-type: none"> 家庭学習習慣が定着できておらず、学習内容の定着が十分にできていない。 教員はICT機器(端末機)を用いて授業の理解度を高めることができているが、学力向上に結び付けられていない。 主に大学進学を目指す生徒へ個に応じたの学習指導力の向上が求められている。 	<p>【成果指標】(生徒)</p> 普通コース：学習支援ソフトを取り入れるなど、個別最適な学びに取り組ませることで、模試の成績が伸びた。	普通コース：模試の年度始めと年度末の学力レベルの値を比較し、成績が上昇した生徒数の割合で評価する 【1年生】 3教科(国・数・英)のGTZ値 対象：4月スタディーサポートと1月進研模試 【2年生】 5教科(国・数・英・理・社)のGTZ値 対象：4月スタディーサポートと1月進研模試(国・数・英)、10月進研模試と1月進研模試(理・社) A 70%以上 B 60%以上 C 60%未満	対外模試結果									
				<p>【成果指標】(生徒)</p> キャリアコース：各種検定試験に合格できた。	キャリアコース：各種検定試験(各種商業科検定・福祉科資格等)の合格者数の割合で評価する A 80%以上 B 70%以上 C 70%未満	各種検定試験結果									
<ul style="list-style-type: none"> 生徒の思考力・判断力・表現力の向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 読書タイムや図書館講座の実施 	教務課	<ul style="list-style-type: none"> 読書活動を通して生徒の思考力・表現力・判断力の下支えとなる力を養成する必要がある。 	<p>【成果指標】(生徒)</p> 「読書タイム」で読んだ本についての感想や考えをアウトプットすることができた。	「読書を通じて自分の感想や考えをアウトプットすることで、思考力や表現力が高まった」と答えた生徒の割合(①+②)が A 80%以上 B 70%以上 C 70%未満	<table border="1"> <tr> <td>①</td> <td>高まった</td> </tr> <tr> <td>②</td> <td>概ね高まった</td> </tr> <tr> <td>③</td> <td>余り高まらなかった</td> </tr> <tr> <td>④</td> <td>全く高まらなかった</td> </tr> </table>	①	高まった	②	概ね高まった	③	余り高まらなかった	④	全く高まらなかった	生徒対象調査(7、12月)
①	高まった														
②	概ね高まった														
③	余り高まらなかった														
④	全く高まらなかった														
<ul style="list-style-type: none"> 進路意識の醸成と早期確立を目指す。 	<ul style="list-style-type: none"> 外部講師によるキャリア教育講演会 ふるさと事業 企業人インタビューDVDの活用 インターンシップ 進路ガイダンス 進路学習 進路講演会(企業・上級学校) 上級学校見学会 地元企業見学会 アントレプレナーシップ事業 	進路指導課 各学年	<ul style="list-style-type: none"> 働くことの意味や自分の適性を理解し、将来の進路設計を立てる力を早期より養成する必要がある。 	<p>【成果指標】(生徒)</p> 自分の適性を十分に把握し、将来の進路について話すことができるようになった。	「自分の適性を十分に把握し、将来の進路について話すことができるようになった」と評価した生徒の割合(①+②)が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	<table border="1"> <tr> <td>①</td> <td>できるようになった</td> </tr> <tr> <td>②</td> <td>だいたいできるようになった</td> </tr> <tr> <td>③</td> <td>ほとんどできない</td> </tr> <tr> <td>④</td> <td>全くできない</td> </tr> </table>	①	できるようになった	②	だいたいできるようになった	③	ほとんどできない	④	全くできない	生徒対象調査(7、12月)
①	できるようになった														
②	だいたいできるようになった														
③	ほとんどできない														
④	全くできない														

重点目標4 他地域や他校と交流することによって災害に向き合い続け、自助・共助の精神を涵養するとともに、被災経験を探究的学びとして再構成し、奥能登の創造的復興につなげる。

個別目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考	
・他地域や他校と交流することによって、自助・共助の精神を涵養する。	・防災に先進的かつ継続的に取り組んでいる他地域と交流し学ぶ機会を設定 ・災害ボランティア活動の実施	総務課	・災害から2年が経過し、被災経験のない教職員や市外・県外からの入学生が増え、災害から得た教訓が薄れつつある。	【成果指標】(教員) ボランティア活動や他校との交流で学んだ自助・共助の精神を具体的な行動で表すことができる。	「ボランティア活動や他校との交流で学んだ自助・共助の精神を具体的な行動で表すことができる。」と答えた教員の割合(①+②)が A 80%以上 B 70%以上 C 65%以上 D 65%未満	① できる ② 概ねできる ③ 余りできない ④ 全くできない	教員対象調査(7、12月)
				【成果指標】(生徒) ボランティア活動や他校との交流で学んだ自助・共助の精神を具体的な行動で表すことができる。	「ボランティア活動や他校との交流で学んだ自助・共助の精神を具体的な行動で表すことができる。」と答えた生徒の割合(①+②)が A 80%以上 B 70%以上 C 65%以上 D 65%未満	① できる ② 概ねできる ③ 余りできない ④ 全くできない	生徒対象調査(7、12月)
・他地域や他校と交流することによって、被災経験から新たな価値を創造するきっかけを得る。	・地域防災を推進していくための研修の実施(講演会の実施) ・交流体験成果発表会の実施	総務課	・復興に対するイメージが現状復帰にとどまっており、新しい価値を見出すことができない。	【成果指標】(生徒) 講演会や発表会を通じて、創造的復興についてのイメージをもつことができた。	「講演会や発表会を通じて、創造的復興についてのイメージをもつことができた」と答えた生徒の割合(①+②)が A 80%以上 B 70%以上 C 65%以上 D 65%未満	① できた ② 概ねできた ③ 余りできなかった ④ 全くできなかった	教員対象調査(7、12月)

重点目標5 各課・学年において若手職員が主体的に業務に参画できる体制を整え、組織的・協働的な業務推進を通して、ワークライフバランスの確保と教育活動の充実を図る。

個別目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考	
・教員の働き方改革の推進	・最終退校時刻の遵守 ・定時退校日の個人設定(各月共通2回・個人2回)	全教員	・ワークライフバランスの重要性を理解して、退校時間を意識した業務推進を更に徹底する必要がある。	【成果指標】(教員) 月4回の定時退校や最終退校時間を遵守できるように、優先順位をつけて計画的かつ効率的に校務を行っている。	「月4回の定時退校や最終退校時間を遵守できるように、優先順位をつけて計画的かつ効率的に校務を行っている」と答えた教員の割合(①+②)が A 85%以上 B 75%以上 C 65%以上 D 65%未満	① 行っている ② 概ね行っている ③ 余り行っていない ④ 全く行っていない	教員対象調査(7、12月)
	・月平均の時間外在校等時間を35時間以内に削減 ・若手職員が主体的に業務に参画できる体制の整備 ・主任のマネジメントによる課内業務の平準化	全教員	・小規模校で職員数が少ないだけでなく、教職経験が10年未満の教職員が3分の2以上を占めるため、主任やベテラン教員に業務が集中している。 ・一人が担当する業務が多岐に渡っている。	【成果指標】(教員) 時間外在校等時間の削減を心がけ、月平均が35時間以内となるように効率的に業務を遂行している。	時間外在校等時間の月平均が35時間未満である教職員の割合(①+②)が全教職員の A 65%以上 B 55%以上 C 45%以上 D 35%未満	① 30時間未満 ② 35時間未満 ③ 40時間未満 ④ 40時間以上	教員対象調査(毎月)
	・一年間の年次有給休暇の取得日数の合計が10日以上	全教員	・一人一人の業務量が決して少なくないため、年次有給休暇を多く取得するとその外の勤務日の負担が増えたり、他の職員の負担が増えたりする。そのため、積極的に取得する職員は少ない。	【成果指標】(教員) 長期休暇に限らず平日であっても、計画的かつチームで工夫をして業務の改善及び能率化を図ることで、年次有給休暇も計画的に取得する。	年間の年次有給休暇の取得日数が10日以上である教職員の割合(①+②)が全教職員の A 25%以上 B 20%～25%未満 C 10%～20%未満 D 10%未満	① 15日以上 ② 10日以上 ③ 5日以上 ④ 5日未満	教員対象調査(毎月)